2026/6/30発行

栃木県
日中友好協会 会報誌
知己

第8号

発行：栃木県日中友好協会青年部
河内郡上三川町大字
ゆうきが丘12-6
0285-52-1588

栃木県国際交流員 邱奕妍(キュウエキケン)さん歓迎会

5月23日、栃木県国際交流員として着任された 邱奕妍 さんの歓迎会が開催されました。当日は関係者が集い、新たな門出を祝福するとともに、今後の国際交流活動への期待を共有しました。参加者は交流を深めながら親睦を図り、温かな雰囲気の中で歓迎の意を表しました。邱さんの今後の活躍が期待されます。

栃木県日中友好協会の皆様
はじめまして。你们好！ 2026年4月より、栃木県の国際交流員として勤務する邱奕妍（キュウ　エキケン）と申します。出身は中国南部の江西省です。江西省は、栃木県の友好提携先である浙江省の隣に位置しており、景徳鎮の陶磁器やネーブルオレンジの名産地として知られています。
大学で日本語を学んだことをきっかけに、これまで愛知県や石川県を訪れる機会に恵まれました。各地で文化交流イベントに参加し、地域の方々と触れ合う中で、異文化交流の楽しさを実感しました。
また、私は言語教育に深い関心を持っており、これまでアメリカおよび中国・浙江省の大学において、中国語教育や国際交流に関わる業務に携わってまいりました。さらに、日本人の方を対象にビジネス中国語の指導を行った経験もあります。
趣味はバドミントンとカラオケで、中国料理を作ることも得意です。日本では特に温泉に入ることが大好きです。
今後、皆様と交流できることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

栃木県国際交流員の送別会を開催

栃木県で活躍された国際交流員　秦長志さんの送別会が開催されました。当日は関係者が集まり、これまでの活動を振り返るとともに、感謝の気持ちを伝えました。参加者からは思い出やエピソードが語られ、終始和やかな雰囲気の中で親睦を深めました。今後のさらなる活躍を願いながら、温かな送別のひとときとなりました。

1年間ありがとうございました。お疲れさまでした。太辛苦了！再见！

協会活動報告

ローターアクトクラブ新入生歓迎会（2026/4/8）

文星芸術大学においてローターアクトクラブの新入生歓迎会が開催されました。歓迎会ではクラブ活動の紹介が行われたほか、参加者同士の交流の機会が設けられました。新入生たちは先輩会員との会話を通じてクラブへの理解を深め、和やかな雰囲気の中で親睦を図りました。今後の活動への期待が高まる歓迎会となりました。

文星芸術大学ローターアクトクラブ新入生歓迎交流会では、新入生や在学生に加え、地域住民や留学生らが参加し、餃子・たこ焼き作りやゲームを通じて親睦を深めた。日本語・英語・中国語が飛び交う国際色豊かな交流の場となり、多くの参加者が新たなつながりを築く機会となった。

女性委員会によるお花見会　（2026/4/18）

宇都宮大学まなびの森保育園において、栃木県日中友好協会女性委員会主催の「春のお花見会」が開催された。当日は好天の中会員や留学生らが交流を深めた。参加者は春の訪れを感じながら歓談を楽しみ、日本と中国の文化や日常生活について意見交換を行うなど、和やかな雰囲気の中で親睦を深めた。

お花見会には留学生も多数参加し、世代や国籍を超えた交流の場となった。参加者からは「新しい友人ができた」「異文化への理解が深まった」といった声が聞かれた。桜を眺めながら交流することで相互理解が促進され、地域における国際交流の大切さを再確認する機会となった。今後も継続的な交流活動が期待されている。

こちらは栃木日中友好協会新設サイトのQRコードです。「知己」に載せきれない詳細な情報はこちらからご覧ください。お問合せや掲載依頼も随時受け付けております！

第3回栃木県日中卓球交流会開催決定

恒例行事となりました「栃木県日中卓球交流会」が9月12日(土)に開催されます。奮ってご参加ください！

第３回栃木県日中卓球交流会

「友情が第一；試合が第二」

日 期	2026年9月12日(土)
受 付	12:30～受付開始・会場準備
時 間	13:00～16:30
会 場	宇都宮サンアビリティーズ(体育館内)
住 所	宇都宮市屋板町251-1
電 話	0285-52-1588
費 用	参加無料
台 数	卓球台（4面用意する予定）
持 参	1) ラケット（＊無い場合は貸します） 2) 室内用シューズ 3) 汗拭きタオル

ルール：11球、3試合 2：1で勝負とする

個人戦：男女年齢関係無く（事務局）＊

団体戦：日・中友好対抗戦（事務局）＊

皆様のご健闘を祈ります。

会場準備の為 8月12日迄締切致します

あとがきを添えて

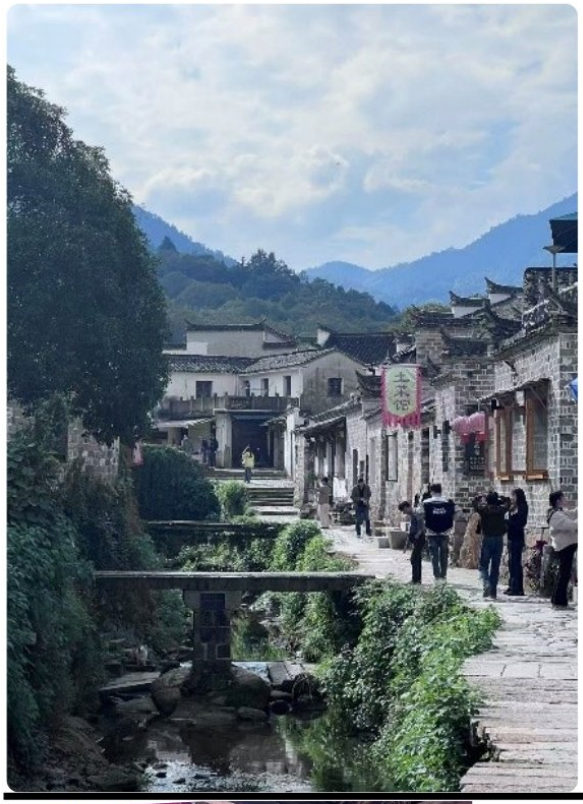
突然ですが、最近、綿矢りさ著『パッキパキ北京』を読みました。中国で生活した経験のある日本人なら思わず「あるある！」と頷いてしまう場面が数多く描かれており、主人公・菖蒲姉さんの視点を通して、中国の日常や人々の魅力がコミカルに表現されています。中国出身の方はもちろん、中国に興味のある方にも楽しめる一冊です。読み終えた頃には、きっと中国の街並みや人々が恋しくなることでしょう。機会があれば、ぜひ手に取ってみてください。(青年部：加藤かれん)

栃木県日中友好協会事務局 連絡先

FAX：０２８５－５２－１５８８
E-mail：tochiginichu.jimukyoku@gmail.com

浙江の知己より

浙江に住む人、学ぶ人、働く人。
我らが知己たちは中国で様々に活躍しています。
彼らの語る中国を聞いて、現地に想いを馳せましょう。



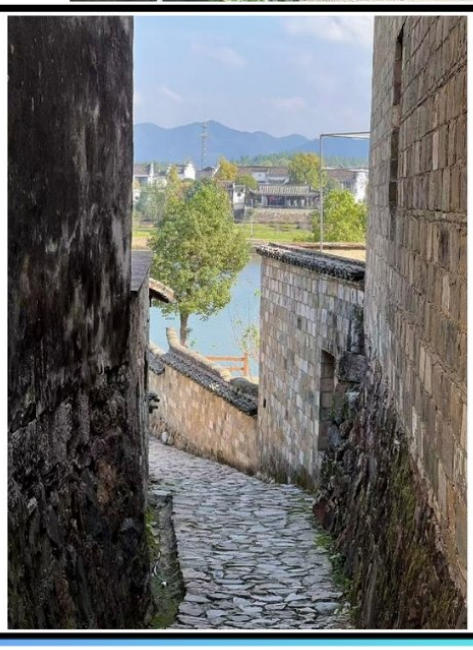
安徽で感じた中国の原風景

昨年、家族と一緒に安徽省宣城市を訪れる機会がありました。そこで印象に残ったのが、「査済（させい）古村」と「桃花潭」です。
査済古村は、中国でも比較的保存状態の良い古い村落の一つとして知られています。村の中には青い瓦と白壁の伝統的な建物が数多く残されており、まるで昔の時代に迷い込んだような気分になります。
しかし、そこは単なる観光地ではありません。今でも多くの人々が実際に生活しており、古い建築の中で現代の日常が続いています。一見すると不思議な組み合わせに思えるかもしれませんが、実際に歩いてみると、それがごく自然な風景として溶け込んでいることに気付きます。

→橋の下で洗濯をしている年配の女性が写っている。都市化が急速に進む中国においても、この村には昔から変わらない生活のリズムが残されており、どこか懐かしく穏やかな空気が流れている。

村の祠堂（しどう）は非常に印象的。長い年月を経た木材には歴史の重みが刻まれている。時空を超え、まるで何百年も前の人々と共存しているような不思議な感覚を覚える。

桃花潭を訪れましたが、正直なところ景色そのものは想像していたほどの迫力はありませんでした。もちろん静かで美しい場所ではありますが、中国には壮大な自然景観が数多く存在するため、見た目だけで言えば特別目立つ場所ではないかもしれません。しかし、実際に訪れてみて感じたのは、桃花潭の魅力は景色そのものではなく、その場所が持つ文化的な意味にあるということでした。



李嘉昱(リカイク)さん　プロフィール

李嘉昱（リカイク）と申します。中国・上海市の出身です。
2018年に宇都宮大学へ入学し、現在まで建築を学んでいます。気が付けば宇都宮での生活も8年目になりました。現在は宇都宮大学中国留学生学友会の会長として、中国人留学生と地域の皆様、日本人学生との交流活動にも積極的に取り組んでいます。宇都宮は私にとって第二の故郷のような存在で、落ち着いた雰囲気がありながら、必要な賑わいもあり、少し足を延ばせば豊かな自然にも触れられます。その居心地の良さがとても気に入っています。

中国人留学生が振り返る、杭州での思い出

中国で育った人であれば、多くの人が子どもの頃に李白の詩を学んだ経験があると思います。私もその一人です。そのため、教科書の中でしか知らなかった「桃花潭」という場所に実際に立った時、不思議な親しみと感動を覚えました。

子どもの頃の私にとって、詩は暗記しなければならない文章の一つに過ぎませんでした。しかし大人になってから実際にその場所を訪れてみると、歴史や文学が急に身近なものに感じられます。目の前に広がる穏やかな景色を眺めながら、「千年以上前の李白も同じ風景を見ていたのだろうか」と自然に想像してしまいました。

その瞬間、教科書の中の文字と現実の風景が一つにつながったような気がしました。だからこそ、私にとって桃花潭の価値は景色そのものではなく、多くの中国人が共有する文化的な記憶が今も息づいていることにあるのだと思います。

また、桃花潭には有名な逸話があります。汪倫が李白を招いた際、「ここには十里にわたる桃の花があります」と伝えたそうです。李白はそれを聞いて喜んで訪れましたが、実際には「桃花」は花の名前ではなく潭の名前だったという話が残っています。もっとも、現在の桃花潭には実際に桃の木も植えられており、千年以上の時を経て、その小さな冗談が本当に実現したようにも感じられました。

現地では桃花酒も味わいました。ほのかな甘みと香りが印象的で、とても飲みやすいお酒でした。その後、汪倫の墓にも立ち寄り、静かに手を合わせました。

短い滞在ではありましたが、目の前の風景と、そこに残された詩や友情の物語に触れることで、この土地の歴史や文化をより身近に感じることができました。桃花潭は、私にとって「風景を見る場所」というよりも、「中国文化の奥深さを改めて感じる場所」として心に残っています。

桃花潭

汪倫の墓

小学生の頃に杭州に家族旅行で初めて訪れた時の思い出です。断橋や雷峰塔など、有名な観光地も巡りましたが、正直なところ、その頃の私は歴史や文化にはあまり興味が無く、むしろ西湖の遊覧船乗り場近くで売られていた「西湖藕粉」の方がずっと魅力的だったことを覚えています。

休日の午後だったこともあり、公園には多くの地元の方々がいました。ベンチに座ってゆっくり過ごすお年寄りや、散歩を楽しむ人々など、皆が穏やかで落ち着いた時間を過ごしていました。そんな風景の中で走り回る私だけが、少し場違いなほど元気だったように思います。

また、西湖は想像以上に広く、まだ小さかった私にとってはかなりの長距離でした。すぐに歩き疲れてしまったため、両親はレンタサイクルを借りて湖畔を回ることにしました。しかし、子どもだった私はそれにもすぐ飽きてしまい、近くの公園で遊びたいと言い出しました。

そこで両親は、何度も失敗していた自転車の練習をもう一度させてみることにしました。そして不思議なことに、その日初めて補助輪なしでまっすぐ自転車に乗ることができたのです。 なぜその日に成功したのかは今でも分かりませんが、周囲の穏やかな雰囲気のおかげだったのか、それとも杭州という土地の持つ不思議な魅力だったのかもしれません。しかし私にとって杭州は、「初めて自転車に乗れるようになった場所」として今でも特別な思い出の地になっています。

その後も何度か杭州を訪れる機会がありました。年齢を重ねるにつれて、子どもの頃には気付かなかった杭州の魅力を少しずつ理解できるようになりました。西湖は単なる観光地ではなく、岳王廟や雷峰塔、断橋にまつわる伝説など、歴史や文化が今も人々の生活の中に息づいている場所です。特に民間伝承や伝統文化が自然に残されている雰囲気は、国際都市として発展してきた上海とはまた異なる魅力があります。

子どもの頃は景色よりもお菓子や遊びに夢中でしたが、大人になった今では、杭州の持つ穏やかな空気や文化の奥深さに惹かれるようになりました。杭州は私にとって、成長とともに見え方が変わっていった特別な場所の一つです。